

# 松蔭 校長室だより

2020年 8月 31日 発行

—校長から保護者の皆様へのメッセージです—

松蔭中学校・高等学校

校長 浅井宣光

(今年度よりHP掲載とClassiでの配信です)

いつも喜んでいなさい。たえず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい(テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 5:16~18)

## 利他の心は「51」でよい

ある学習塾の塾長先生から著書をいただきました。文中の一節「受験勉強も利他の心で」が印象に残り、何度も読み返しました。40年ほど前に設立されたその塾は、勉強だけでなく感謝や自主・自立といった人間教育にも積極的に取り組んでいることが次第に評判となり、当初30名だった塾生数は今や7千名の規模へと発展しました。自分の成績向上と志望校合格だけを目標に勉強してもなかなか根気が続かないが、人の役に立とうと頑張る気持ちは自分を奮い立たせ、人間としても成長できると記しておられました。「利他」とは、他人のために役立とう、人が利益を得られるよう生きようとする姿勢をいいますが、「自己犠牲を払わないといけないんですか」という質問が必ずあるそうです。塾長は、「自分のためにすることと、人のためにすることにかかるエネルギーの割合を49対51にして、2の分だけ人を多く思えばよい。人に喜んでもらいたいという気持ちを、ほんの少しだけ増やしておけばよろしい」と語り続けました。それからしばらく経った頃、新聞紙上で若手の女性プロゴルファーのインタビュー記事を読みました。彼女は、京セラの創業者、稲盛和夫さんの著書『心』を読み、初めて「利他」という言葉を知りました。すると自身の心に変化が起り、ゴルファーとして親に恩返しをしたり周りの人を喜ばせたりすることは昔から考えていたが、例えばお手洗いで洗面所を綺麗にしておくだけでなく、次の人が気持ち良いようにペーパーの切り方まで考えるようになった。ささいなことだが自分の心まできれいになっていくように感じている、という内容でした。「利他」の言葉を知ることによって、自分の次にお手洗いをを使う人への気遣いの行為が生まれ、その行為が日常の心のあり方や感情に良い影響を与えています。小さな出来事の積み重ねが、人間としてのあり方に深みと豊かさを加えるように感じます。キリスト教は、神様は自分も人も平等に愛してくださるのだから自分も人も同じくらい大切にしましょうと教えますが、現実には実践が難しい局面も多いように思います。学校生活の様々な場面を思い浮かべながら、塾長とゴルファーの「利他」に関するエピソードには得心したものです。

コロナ対策としてのマスク着用は、当初、WHO（世界保健機関）が効果に疑問を投げかけるなど議論になっていましたが、現在は一定の効果があるとされています。ウイルスの拡大防止のために、公共の場でのマスクの着用を義務化する国が増え、シンガポールやマレーシアでは違反者に対して罰金を科しています。一方、日本では状況は異なり、人に風邪をうつさないようマスクをすることは一般的ですし、冬場の人混みなどでは予防のためのマスクもよくある光景です。先日の報道では、スーパーコンピューター「富岳」がマスクによる飛沫抑制の効果について、布マスクで7割、不織布マスクで8割との結果を出したそうです。新型コロナウイルスは感染した人の3~4割は無症状で、気付かないまま人との「濃厚接触」が発生して感染するリスクがあるといわれています。人に「感染させない」配慮が求められます。予防目的を含めてコロナが収束するまでの数か月の間には、マスクの着用が日常生活の基本的な人への心遣いと言えますが、「自分よりも人のため」の割合をほんの少しだけ増やしておけば、強制ではない「利他の心」が世の中に確実に存在する証（あかし）になるように思います。

テレビドラマ「半沢直樹」が大好評です。「やられたらやり返す」「倍返しだ!」と叫ぶ、堺雅人さん演じる主人公の姿に引き込まれては毎週日曜の放映を待っています。「51」の「利他の心」と、自分を大切にすることも当たり前と思っていれば、余裕のある時には気遣いの「倍返し」も難なくできるのではないかと。先に述べたプロゴルファーのように心のきれいな女性へと成長し、職場でも地域でも愛されている将来の松蔭生の姿を想像しています。

## 保護者「おしゃべり会」(8/29)を開催しました



<おしゃべり会の様子>

今年度第1回のテーマは、「コロナ時代のストレスマネジメント」。先週土曜日、8名の保護者の方々と本校スクールカウンセラー(SC)3名、私ほか教員2名が出席しました。武藤SCの講話を受けて、テーマとなったストレス、スマホ依存や反抗期の親子の関係など、ざっくばらんに思いを語りあうことができました。出席者からは「次回も楽しみにしています」との感想をいただいています。

現代社会ではストレスは避けられません。思春期の子供にはただでさえ振り回されるように感じる人が多いものです。また、コロナの影響で大人も心の余裕を持ちにくいだけに、子供への要求度をやみくもに高めてしまいがちです。「早くクラスに馴染んでほしい」「仲の良い友達を作ってほしい」「勉強にしっかり取り組んでほしい」「進路について真剣に考えてほしい」等々。子供には子供自身のペースがあることを、頭では理解していても、感情がついていかないこともしばしばあります。「おしゃべり会」は、日頃感じているちょっとしたことを保護者どうして気軽に語り合う場です。ルールは、人の意見を否定しないことと話された内容の守秘のみです。ご参加をお待ちしています。

## 「ありがたや、ありがたや」

猛暑のなかで2学期を始めて早2週間が経ちました。始業式は感染対策のため1学期と同様に教室での放送礼拝で行い、講話は「感謝の言葉」をテーマに次のように話しました。本日より通常の授業時間帯です。長い2学期ですが、いつも「ありがとう」の気持ちを影のように自分にくっつけながら過ごしたいものです。

今年、文化祭が中止となりましたが、代わりに文化部の11のクラブが活動発表会を開催しました。そのうち漫研の展示教室にお邪魔したときに、「ありがたや」というタイトルの部の冊子をいただきました。これまでの文化祭でも、毎年このタイトルの冊子が発行されていましたが、そのタイトルの由来についていろいろな人に尋ねてみましたが、誰も知らないということでした。「ありがたや」というのは、ありがたい、とにかく感謝したい、助かる、という意味ですが、「ありがたや」の言葉の響きがとても心地よく感じられます。「ありがたや、ありがたや」と静かに繰り返していると、何となく別人になったような気分です。

さて、「ありがたや」という言葉から、認知症という病気にかかった一人のお婆さんの話を思い出しました。認知症というのは、昔は痴呆症と呼ばれた病で、脳の働きが低下して様々な症状が現れ、ある部分の記憶が完全になくなったり、言葉を思い浮かべることが難しくなったりします。そのお婆さんも、病気が進行して、だんだんと言葉を忘れていったそうですが、最後まで口にしていた言葉が、「ありがたや」でした。そのお婆さんの人間としての根っ子の部分には、周りの人への感謝の気持ちがしっかりと根付いていたということかなあ、と思いました。

チャプレンに「どんなことにも感謝しなさい」という聖書の言葉を読んでもいただきましたが、感謝することは、神様が私たちに向けて与えてくださっている恵みにつながっているということだと思えます。仏教を始めた釈迦(しゃか)という人も、次のように話したと記録にあります。太陽があなたを照らす時、あなたの影がいつも足元にくっついているように、いつも「ありがとう」の感謝の言葉を自分にくっつけておきなさい。神様も仏様も、「ありがとう」という感謝の言葉には意味があると教えました。その教えに触れた世界中の人々は、感謝の言葉の素晴らしさを知っているのだと思えます。「ありがたや」の言葉を最後まで忘れなかった認知症のお婆さんは、そのように気付き、心に

いつも思っていたのだと思います。

コンビニでアルバイトをしている卒業生から聞いた話です。レジでお金を受け取って商品を渡すとき、ありがとう、と言ってくれるお客さんと、無言のお客さんがいる。ありがとうの一言で、心が温かくなるし、コロナの時代となつてからは特にそう思う、と話してくれました。お金を払っているから、ありがとうという言葉など要らない、という考えの人もいるかも知れませんが、この卒業生が抱くような気持ちは、誰でも感じる事だと思います。

ちょっとしたこと、ささいな事でも「ありがとう」と感謝の言葉を言う習慣くらい、心掛け次第ですぐに身に付くと思います。「毎日、ごはんを用意してくれてありがとう」「学校に通わせてくれてありがとう」「いつも話しかけてくれてありがとう」「挨拶の声をかけてくれてありがとう」。1学期からクラスの掃除では、感染症対策のためにトイレの当番は無くなりました。かわりに先生方が毎日、消毒液のボトルを手にして、教室や廊下だけでなく、トイレの消毒もしています。先生方にも「ありがとう」と、ひと言、声をかけてあげて欲しいと思います。2学期も「オープンハート、オープンマインド」のスクールモットーとおおり、心を開いて感謝の言葉を伝え、誇りある松蔭生の姿を見せていただきたいと思います。 (8月18日2学期始業式 校長講話より)